

「ありのまま」を受け入れる新井さん

日野孝幸

・ 動機

・ インタビュー

- 1 . 新井さんと仏教思想
- 2 . 大学再入学
- 3 . 村田さんとの出会い
- 4 . 夢を追い求める力と他人に惑わされない強い意志
- 5 . 新井さんとお母さん
- 6 . 「生きる」とは、「学ぶ」とは

・ 結論

・ 終わりに

・ 動機

私と新井さんとは、今を遡ること4年前の1999年の2月、私がアルバイトをしていた「ビーラウンド」という清掃会社で知り合った。当時私は、前年の12月に留学先のイギリスから帰国したばかりで、4月から日本語教師になるべく、養成学校に通おうとしていたところであった。

実は私は、清掃会社に対し偏見を持っていて、そこにいる人はみんな乱暴者で、教養もない人が多いのではないかと思っていた。しかし、ビーラウンドで働いている人はみんな真面目でやさしく、仕事に熱心だった。中でも新井さんは、日頃の勤務態度が真面目なことはもちろんのこと、「生きる」、「働く」とは何か、そして「学ぶ」とは、といったことを常に考えているような人で、それまで自分が抱いていた偏見がなんて意味のないものだと気づかせてくれた人だった。

新井さんの考えのよりどころになっているのは、仏教思想からとのこと。あるときから仏教に興味を持つようになり、仕事をやめ、大学に再入学し、仏教を専攻することにしたそうだ。

私が新井さんに大きな魅力が感じられる点として以下の2点が挙げられる。

夢を追い求める力がある

私は特にやりたいこともなく、そして冒険心もなく、ただ安定したものだけを求めてきた。ところが新井さんは自分のやりたいことのために仕事を投げ打った。これ

はとても勇気があることで、なかなかできるものではないと思う。

他人に惑わされない強い意志がある

私は今までの人生で絶えず人の意見に影響されてきた。そしてたびたび自分の意見を変えてきた。そんな私の弱さに比べ新井さんは、仕事をやめ大学に再入学するときの周囲の反対にもかかわらず、自分の意志を貫いた。

私はインタビューを通して、新井さんがなぜ仏教思想に興味を抱くようになったのか、そこからどんなことを学び、何を実践しているのか。そして将来についてどう考えているのか。特に、一見すると大学の専攻と現在の仕事とは関係がなさそうに見えるが、新井さんはそれをどのように捉えているのか。そして新井さんの強い意志がどこから来ているのかを探してみたい。

・インタビュー

1. 新井さんと仏教思想

まず、新井さんのプロフィールを紹介しよう。

新井恵さん。52才。東京出身。映画監督を目指し、東京写真大学に入学。卒業後、東宝撮影所に入社。38才の時、退職し、駒沢大学・仏教学部へ入学。現在「ピーラウンド」という清掃会社に勤務。

前述のとおり、新井さんの考えが仏教思想と関係しているのは明白な事実なので、それに興味を持ったきっかけについて聞いてみた。

「ちょっと話が長くなってしまおうのですが、私が東京写真大学を卒業した当時（1973年）映画産業が不況でした。映画監督になるために、東宝撮影所という映画会社に就職したのはいいんですが、仕事がない時代。そのため、関連会社に出向させられたり、契約社員にさせられたりした人が大勢いました。会社としては、映画を作るという芸術性を求めるよりも利益を求めていたんですね。

そのような中で、私は東宝サービスセンターというビル管理会社へ出向させられました。そこでとんだ事故が起きてしまいました。一人のスタッフが、作業中に天井から落ちて死んでしまったのです。現場責任者は、責任をとらされ、退職させられました。で、私が、まだ新人で若いけど大学も出ているから、代わりとしていいんじゃないかということで、24才の若さで、部下28人を率いる責任者となってしまったん

です。

私は子供のときから母に、人に迷惑をかけてはいけない、人にはやさしくしなさいといった教育を受けてきました。ですから、責任者になって、みんなにとっていい人であり、よく思われたいと必要以上に思ってしまったのです。その結果、パニック症候群（心身症、ノイローゼ）になってしまいました。電車に乗ると動悸がしたりして。はっきり言うと、会社に行きたくないんです。こうなってしまったのも、自分が優等生で、他人に頼ることができなかったからなんですね。

そんなある日、精神修養（仏教哲学）の本と出会いました。それ以後、プレッシャー（強迫観念）から解放される方法を模索するために、多くの仏教関連の本を読むようになりました。」

私と一緒に仕事をしていたときの新井さんは、自信にあふれ、余裕で仕事をこなしているように見えた。なのに、このような過去があったとは。

私はさらに、これらの仏教関連の本について、話を進めた。

「そこでわかったことは、『誠実に一生懸命生きた上で、ありのままの自分を受け入れること』です。人間は、いい人になろうとしても、自分の知らないところで物事は移り変わっていきます。これは因縁と呼ばれるものであり、また縁起と呼ばれるものです。人は何か意図があったり、思惑があったりして、物事を行ってはいけないのです。」

ここは、ちょっとわかりにくいので、具体的に説明してもらった。

「たとえば、結婚したいと思う人がいたとします。その人に対し、結婚したいという下心を持って、接近してはいけないのです。この世の中は、そういう意図や思惑に関係がなく、移り変わっていつているのです。」

新井さんは、世の中というものが自分の意図や思惑に関係なく移り変わっていくということを知り、そのような中で悩んでいる自分がなんて、ちっぽけな存在なのかを痛感したとのこと。そして「～しなければならない」というプレッシャーから解放されるに至ったのだ。

私はそのプレッシャーからの解放が何につながったかを尋ねてみた。

「ようやくプレッシャーから解放されると、今度は、理想と現実の狭間にいる自分を見つめるようになりました。会社において、自分の本意としていないところにいる自分について考えるようになったのです。そして、お金や名誉ではない、本当の幸せと

は何なのかを考え始めるようになり、残りの人生を充実させるためにも、自分の生き方や考え方をさらに追求したいと思うようになり、大学への再入学を決意しました。」

ここまで新井さんの話を聞き、まず私が驚いたことは、すべて自分で気づき、決断してきたことである。確かにそれは新井さんだけの力ではなく、本による気づきがあったのかもしれないが、本から得た知識をどう解釈し、そこから先、どう行動を起こすかは自分の判断による。新井さんは安定した職を投げ打ってまで、自分の生き方を追求したのだ。恐れ入ってしまう。

それにひきかえ、私はあるときまで、自分ではなく他人によって、決断させられていたのである。「しかし最終的に決断したのはあなたでしょ？」と言われるかもしれないが、自分の中では、自分で決断したのではなく、他人に決断させられたと思っている。私は、主体的に自分で行ったことがなかったのである。

2. 大学再入学

自分の生き方や考え方を追及するために大学への再入学を決意した新井さん。新井さんの人格形成の上で、避けては通れない大学時代のことについて聞いてみた。

「大学生活は本当に楽しかったですよ。なにより好きな勉強ができる喜びが大きかったですね。」

この考えに私はまさに共感できる。というのも、学生時代には、勉強は当然の義務であり、義務であるがゆえ、させられているという感覚があった。それが一度社会に出ることにより、自分にとって何が一番やりたいのかがわかると、もう一度、勉強したいと思うようになる。私は幸いなことに、家族のサポートなどもあり、現在、こうして好きなことができている。これは喜び以外のなにものでもない(本来なら、20才前後で、自分の将来をしっかり考えていなければいけなかったのだが。だが、冗談ではなく死ぬ前に学ぶことの大切さがわかり、自分のやりたかったことが見つけられ、本当によかったと思っている)。

「大学では、その多くがゼミから学んだことなのですが、『生きがい』『知らないことを知っていく喜び』『誠実に、今を一生懸命生きることの大切さ』『目的意識を持つことの大切さ』『尊敬できる人(指導教授)がいて、同じ目的を持っている人(学生)とともに学べる幸せ』などです。

特に『目的意識を持つことの大切さ』は実感できました。」

私はその「目的意識を持つことの大切さ」の具体例を語ってもらった。

「私は当時、学業のほかに2つのアルバイトを抱えていました。睡眠時間は連日3時間でした。学友たちは口々に、いつかは倒れてしまうのではと心配してくれましたが、私は好きな勉強ができる喜びで、全く疲れを知らず、結局4年間、1度も病気になることはありませんでした。」

病は気からと言うが、まさしくそうなのだ。目的意識というのが、私たちにとっていかに大切かがわかる。

3. 村田さんとの出会い

私は新井さんに、大学時代に抱いていた夢について、聞いてみた。

「大学時代に学んだ知識を生かして、講演家やカウンセラーとして、生き方や考え方などをレクチャーする仕事をしたいと思っていました。」

ならば、どうして、現在の清掃会社に就職したのか、そしてその仕事と大学で学んだこととのギャップについて尋ねてみた。

「大学時代のアルバイト先(ビル管理会社)で知り合った村田さんとの出会いがこの会社で働くきっかけでした。彼がそのビル管理会社をやめ、自分で会社を作ろうとしたとき、アルバイトをしていた10才年上の私に声をかけてくれたのです。」

村田さんは面白い人で、社長でありながら利潤を追求するというより、人の幸せのために働こうとする人でした。そして会社によって社員の人格を形成することに重点を置いていたのです。これが会社の方針だったのです。具体的に言うと、日本には接待といって、仕事をもらうために料亭などにクライアントを連れていくという習慣があるのですが、村田さんは一切そういうことをしませんでした。彼は信頼による人との付き合いを大切に、誠実に仕事を行うことにより、人は裏切らなくなるという考えを持っていたのです。それには、社員一人一人の人格形成が大切だと思ったのです。」

私も村田さんを知っているのだが、本当に腰が低く、社長という感じがしない人なのである。

「私は働くのなら、人間本来の生き方（地位や名誉を求めない。人との誠実なつきあい。うそをつかない）ができ、自分を表現でき、人間教育ができる会社で、と考えていたので、村田さんの考えに賛同し、行動をともにしました。」

私は新井さんが会社でどのような人間教育を行っているのか、そして、それがどのように大学時代の専攻と職業と結びつけているのかを質問してみた。

「人間教育といったら大げさかもしれませんが、ミーティングなどで自分の経験したことを伝え、それをみんなで共有し、考えてもらっています。最終的にはみんなが生きがいを持ち、幸せになってもらうために行っているのです。」

清掃会社と仏教というと、一見すると、全く接点がないように見えても、人間が生きる上でとても大切な人格形成の面で、共通点があると思います。私は今、大学で学んだことを会社で存分に生かせる喜び（＝世間で生きる喜び）を感じています。清掃会社で働こうが、映画監督になろうが大学教授になろうが、そういうことは関係がなく、要は『自分がどう生きるか』ということが大切なのです。なので、現在の職場と大学時代の専攻とのギャップは全く感じていません。」

私はこの話を聞いて、全くそのとおりだと思ってしまった。たしかに職業などというのは、学歴と同じように一種のステータスだと思うが、それとは関係なく私にとって「自分がどう生きるか」というのが大切なのだ。もし社会的ステータスがほしければ、私は否定しない。それを目指してがんばればいだけなのである。ただし、それをひけらかしてはいけないと思うが。

4．夢を追い求める力と他人に惑わされない強い意志

私にとって、新井さんの最大の魅力は、私に偏見を気づかせてくれたその人柄はもちろんだが、何より、夢を追い求める力と、誰にも惑わされない強い意志を持っていることは前述の通りである。38才で、安定した職を投げ打ってまで大学へ再入学したときには当然周囲からの反対もあっただろう。しかし、その反対に微動だにせず、自分の生き方や考え方を追及するという夢に賭けた。

私は新井さんに、これらの力がどこから来ているのか、尋ねてみた。

「強い意志も夢を追い求める力も、分けて考えられず、両者は密接に関わり合っています。『夢』という言葉は、ちょっと漠然としているので、『目的』という言葉に置き換えたほうがいいのですが、その『目的』とは、さっきも言いましたが『自分がどう

生きるか』ということです。私の場合、『すべての人に幸せになってもらいたい』という目的があります。それがひいては自分の喜びに通じます。これは私にとって真実の喜びなのです。君の言う、私が誰にも惑わされない意志を持っているように見えるのは、『すべての人に幸せになってもらい、そして真実の喜びを味わいたい』というところから、来ているのですね。」

新井さんの強い意志は、人の幸せを願う気持ちから来ていたのだ。私にも、人の幸せを願うような気持ちがなくもないが、それでもそれを目的には生きてこなかった。どうしても自分中心の目的の実現を考えていた。確かに新井さんの言うように、人の幸せが自分の喜びにつながるなら、人の幸せを願えるようになる。

新井さんはさらに付け加えた。

「また、すべての人々が泣いたり笑ったりしながらでも『真実に目覚めて生きること』も望んでいます。これも、自分の喜びに通じると思うのです。『真実の生き方』とは『すべてを受け入れた中で、ありのままの自分とともに悩み苦しみながら、考えて生きていくこと』なのですが、人々が現実をすべて受け入れた中で自分の生き方を貫いてもらえたら、私はこの上ない喜びを感じ、愛すべき人々とともに生きていてよかったなと感じるでしょう。」

私は、ここで自分の人生を振り返ってしまった。私はこれまで、絶えず人の意見に左右されてきた。大学の学部選び、卒業後の進路決定、転職など、大きな節目と言われるようなところで、他人の意見に振り回されてきたのである。それは、困難からの逃げという、逃げの人生を表していた。これらの自分の経てきた道は、決して無駄ではなく、それがあったからこそ今の自分があるのだ、と都合のいい解釈をしているが、この解釈は誠実に生きて初めて成り立つ。私は誠実には生きてこなかったと思う。自分だけがよければいい、その場だけ楽しければいいなどと考えていた。新井さんの言葉により、誠実に生きることの大切さを再認識したが、もう少し、目的を持って自分がどう生きたいのかを考えておくべきだったと悔やんだりもしている。

いずれにしても、他人に何を言われようが、ありのままの自分を受け入れ、誠実に一生懸命生きるという信念を持っていれば、決して他人に惑わされないであろう。

ここで、新井さんの誠実な仕事ぶりを紹介する。私がアルバイトとして入って、まだ間もないころのことだ。新井さんとペアーになり、あるアパートの清掃に行ったのだが、そのときの新井さんの指導は、こんなことまで教えるのかというくらい懇切丁寧だった。前述のように当時の私は、日本語教師養成学校に2ヶ月後に入るようになっていたので、その間しか働かないということを知った上で新井さんの指導だったのだ。新井さん曰く

「いくら短期間のアルバイトの人がやった仕事でも、お客さんから見たら、『ビーラウンド』の仕事になる。私は清掃業というのはサービス業であり、サービス業の本質は、いかにお客さんに喜んでもらえるかだと思っている。アルバイトだからといって、中途半端な仕事をされては、会社にとっても、お客さんにとっても、ましてや、君にとってもよくない。だから私は、君に細かく指導するのだ」と。

新井さんは常に相手のことを考えている。そして、一切手抜きをせずにながらんでいる。これもひとえに、人の幸せを願う気持ちからきているのだろう。ただし、いくら新井さんの話に共感できたから、今日からすべての人の幸せを願おうと思ってもあまりに現実味がないので、とりあえず身近な人の幸せを願ってみたいと思う。それは私の場合、両親であり、友達であり、現在勤務している日本語学校の学生であったりする。この中でも日本語学校の学生だが、彼らは大いなる夢を抱いて日本へ来ている。だが、私の経験上、彼らの多くは、日本という異国の地で生活するうちに、進学や金銭、さらには人間関係など、さまざまな悩みを抱えるようになる。そのようなことを口にできる学生なら対処のしようがあるが、口にしない学生に対してはどのようにすべきか。それには、彼らのちょっとした変化に気づくよう、細心の注意を払うことが大切だと思う。重大な問題が起きてからでは遅いのだ。その異変に気づいたらすぐに、適切なアドバイスを送る。それがひいては、彼らの夢の実現 = 幸せにつながるだろうから。

5 . 新井さんとお母さん

さて、これまで話をしてきた中で、たびたび新井さんの口からお母さんの名前が挙がってきた。もしや、新井さんの思想に重大な影響を与えているのではないかと思い、お母さんについて質問してみた。

「実は、一昨年(2017年)の2月8日に、母親が亡くなりました。母親は私の人格形成の上で多大な影響を与えました。母親の教え 悪いことをしてはいけない、人にやさしく、動物をいじめてはいけない等、今でも私の考えの基本になっていて、さっきの強い意志や目的を追求する力の基にもなっています。」

やはり、新井さんの思想に重大な影響を与えていたのだ。それは、新井さんの大学時代のことを尋ねたインタビューからもわかる。

「今回の母親の死は、私の人生観も変えました。それは『今まで物を食べ、呼吸をしていた人が死ぬことにより物体となる。人間は死とともに生きていて、死へ向かっている。なら、無駄な人生を送ってはいけない。生きていうちに何かやらねば』

との考えが生まれてきたのです。」

6. 「生きる」とは、「学ぶ」とは

これもインタビューを通してたびたび新井さんの口から出てきた新井さんの人生のキーワードになっていると思われる「生きる」こと、「学ぶ」ことについて、新井さんなりの考えを聞いてみた。

「死ぬまで生きるということを考えれば、『充実して生きる』ことが大切ですね。それに『人の喜びが自分の喜び』ということを探めながら生きることも大切です。そして『学ぶ』については、素直な心を持ち、人の意見から自分がどう感じるか。それには自分が絶えずアンテナをはりめぐらせ、社会と関わり合いを持つことが大切だと思います。学校だけではなく、世間の中で生きることも、『学ぶ』ことなのです。」

・結論

私は現在、新井さんが大学に入り直したときの年齢と同じ38才である。日本人男性の平均寿命を考えた場合、だいたい人生の折り返し地点にさしかかっているが、若いときの1年と年をとってからの1年では、比べ物にならないくらい年をとってからの1年は早く過ぎる。あっという間に老年になってしまうだろう。だから、1年1年を無駄にしたいくないという気持ちが強まってきている。そして、この年になり思うことは「学ぶ」ことの大切さだ。学ぶことに終わりはないから、そこには当然、続ける、あきらめないという強い「意志」が必要になってくるだろう。

私は社会人になってから、32才のとき、ある人と出会うまで、全く勉強をしなかった。その人との出会いにより、たった一度の人生を大切にしなければならないということに気づかされ、学ぶことの大切さにも気づかされた。そして、新井さんとの出会いによりその気づきが「確信」へと変わった。

現在、ささやかながら私にも夢がある。近くにありそうでなかなか届かない夢である。あきらめようと思えば簡単にあきらめられる。うまくいかなかったりすると、挫折しそうになる。このままかなわぬ夢で終わってしまうのではと、マイナス思考になってしまうこともある。

だが、今回の新井さんとのインタビューを終え、私自身の考えに変化を感じるようになった。それは、「すべてをありのままに受け入れ、こだわらずに、誠実に生きる」という言葉からだ。

これまで、私は「すべてをありのままに受け入れること」はできなかった。どうしても、失敗でもすると「こんなはずではない」と思ったり、成功している人に対して嫉妬したりして、自分が情けなく思っていた。

しかし、このような自分も、誠実に生きている限り、その現実を受け入れれば問題がないことがわかった。そして、「すべてをありのままに受け入れ、こだわらずに、誠実に生きる」という言葉をしっかりと胸に刻んで生きていけば、他人に惑わされずに生きていけるのではないかということも。

ここに、ある年の、新井さんからもらった年賀状がある。最後の文面に、こう記してある。

「『学ぶ』ということは、乾いた砂が水を吸い込むように、これでいいということはありません。いつまでも学び続けてください。」

ありのままを受け入れ、強い意志を持ち、そしていつまでも学び続けることにより、少しでも自分の夢に近づきたい。そして、なにより今後も誠実に生きたいと思う。

・終わりに

この「言語文化」という授業は良いにつけ悪いにつけ、とても考えさせられるものだった。たとえばレポートをまとめるという作業において、取り上げる人の魅力を自分だけわかって満足していればいいのではなく、最低限、クラス内のみんなに納得してもらわなければいけない。さもないと、万人にこのメッセージを発信しても、極端な話、誰にも理解してもらえないという状況に陥ってしまう。要は、他人の意見を取り入れて、論理的整合性を確認し、そしてインタビュー相手の話を自分の問題として捉えていくだけの話であるのだが、これがなかなかむずかしいことに気づかされる。

「クラスの連中なんか、関係ない。俺さえその人のよさがわかっていればいいんだ」などとは言ってられないのである。

この授業は、結構脱落する人が多かったのだが、それは明文化されていない制約のためや、周りからいちいち言われるのがいやだったり、もうちょっと、自分の好きなようにやらせてくれよという思いが多かったからかもしれない。

かく言う私なども、自分のイメージしていたものと、なにか違うなと思わないでもなかったが、途中で挫折するのは絶対いやだったし、なにより、学ぼうという自分の気持ちに対し、辞めるなどという不義理な態度ではいたくなかったというのが正直な気持ちだ。

良いにつけ悪いにつけと言っておきながら、なにか悪いことというか、大変なことがかり言っているのではないかと思われてしまいそうだが、そんなことはない。良いことがちゃんとあるのだ。それは、この授業が回を重ねるごとに、他人の意見を受け入れることの大切さや、さらには独りよがり生きていくことの危険性などをわからせてくれたことだ。極論すれば、この授業が私に社会の一員だということを再認識させてくれたことである。

それはこの教室という狭い空間が、社会の縮図に思えるようになってきたのである。

「なんと大げさな」と思われるかもしれないが、これは事実だ。10代?から50代のクラスメートがいる「言語文化」。国籍の違いだけではない世代間、性差、さらには立場の違いや、その人の置かれている境遇の違い。

「なんで、こんなこともわかってくれないのか? あ、そうか。そういうのを経験したことがないからわからないのか。」

「なんで、そんなことを真剣に悩んでいるの? あ、価値観がちがうのか。」

「私は だと思えます。へえ、私はそんなことまで全然考えていなかった。」etc

この授業は、社会で生活する上で最も重要なことを教えてくれた。つまり、我々にとって日本社会だろうがどこの国の社会だろうがに関係なく、お互いの意見を尊重し、認め合い、そして話し合いで解決していくことの大切さを自覚させてくれたのである。これらはいかに偏見や差別が無意味であるかということも暗示している。

私はこの「お互いの意見を尊重し、認め合い、そして話し合いで解決していくこと」が、自分を成長させてくれるということも実感できるようになった。社会に暮らすということが自分を成長させてくれるということが実感できたのである。

私は、死ぬまで自分が成長したいと思う。つまり、人との接触を通じ、社会の一員として暮らしていきたいと思う。

実は、今から6年前、ある人の提案のもと、日本という狭い枠にくくられるのではなく、自分の視野を広げるため、そして自分の将来を見つけるために、オーストラリアへ旅立った。私は日本を出発する10日前に結婚をしたのだが、なにを隠そう、前述の「32才のとき、ある人と出会うまで(中略)その人との出会いにより、たった一度の人生を大切にしなければならないということに気づかされ、学ぶことの大切さにも気づかされた。」の、この「ある人」が、私と結婚した人であり、私を深い眠りから覚まさせてくれた人なのである。だが、その異国の地では、私は会社の人間関係に疲れ、家に帰ってからも相変わらず会社のことをひきずり、彼女とは将来の夢について語るというようなこともなく、そのうちお互いの関係もうましくなくなってしまう。そして、離婚も決定的になったある日のこと、私はもう人と関わり合いたくない、人の顔をうかがいながら生きていきたくないとまで、思うようになってしまったのだ。

結局彼女とは別れたが、幸いなことに、周囲の励ましなどから、なんとか立ち直ることができた。だが、今でももし、あのまま人との交流を拒否していたらと思うとぞっとする。それは、自らの成長を拒否することを意味しているからだ。

最後になるが、私はこの活動に参加できたことをとても感謝している。それは多くの気づきを与えてくれたクラスメート、リーダーとして滞りなく授業の進行をすすめられた三代さん、そしてこの活動を計画された細川先生と出会えたことに対する感謝を意味している。

本当に6年前に人生を投げ出さなくてよかったと思っている。